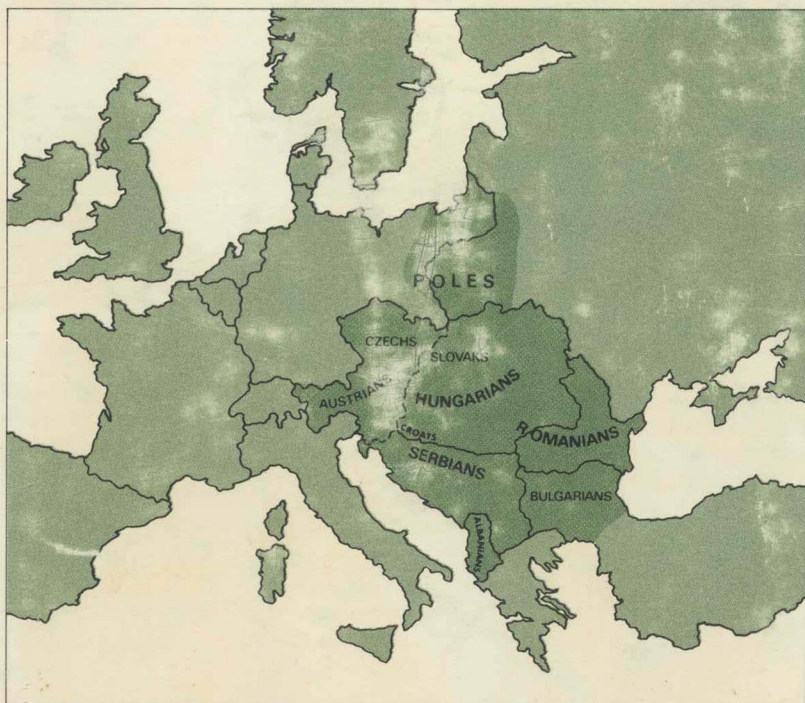


東欧経済史の研究

南塚 信吾 著



ミネルヴァ書房

東欧経済史の研究

—— 世界資本主義とハンガリー ——

南塚 信吾 著



ミネルヴァ書房

《著者紹介》

みなみ づか しん ぎ
南 塚 信 吾

1942年 富山県生れ
1970年 東京大学大学院社会学研究科国
際関係論専門課程博士課程修了
現 在 津田塾大学助教授

東欧経済史の研究

1979年12月20日

第1刷発行

検印廃止

定価5000円

著 者 南 塚 信 吾

発 行 者 杉 田 信 夫

印 刷 者 林 健 次

発 行 所 株式 ミネルヴァ書房
会社

京都市山科区日ノ岡堤谷1

電話 (075) 581-5191

振替京都8076番

©南塚信吾, 1979

大洋社印刷・新生製本

3033-55005-8028

Printed in Japan

序 文

本書は、東欧現代史の理解のために筆者が重要と考えたかぎりでの東欧の「長い一九世紀」（一八世紀末から第一次世界大戦前までの時期）の経済史上のいくつかの問題を、ハンガリーを中心にして、研究したものである。したがって、本書はつぎのようないくつかの限定と特徴を持っている。

第一に、本書は東欧経済史の概説でもハンガリー経済史の概説でもない。また、それは「長い一九世紀」についての概説でもない。それはあくまでも、東欧現代史の理解のために重要と思われるいくつかの経済史上の問題を選択してそれを明らかにしようとしたものである。とはいえ、この分野の研究の我国における状況を考えて、本書では概説的な説明も加えてはある。

第二に、本書は純粹な経済史の研究ではない。本書は、経済の自動的・法則的發展やその「型」を明らかにするという方法とっていない。そうではなくて、本書は、政治を条件づけるとともに、政治が動かそうとする対象ともなっている経済過程というものを明らかにしようとしている。筆者の考えでは、一九世紀中頃以降の歴史の研究については、政治との関係を自覚しつつ経済過程が研究されねばならないと思われるからである。

第三に、本書の直接対象とする時期は「長い一九世紀」にあるが、筆者はたえず、現在の東欧、あるいは少くとも第二次世界大戦後の人民民主主義革命期の東欧というものを念頭に置いている。あえて言うならば、近年日本で高い関心を集めている東欧の社会主義諸国の経済改革や第二次世界大戦後の東欧諸国の人民民主主義革命と社会主義建設は、少くとも一九世紀以来の東欧の資本主義發展のもたらした政治・経済的な成果の継承とその諸矛盾の克

服に向けられていると言っても過言ではないのである。このような問題意識は本書の本文に必ずしも明示的には出てきていないかもしれないが、ある程度行間や注に出ているのではないかと思われる。

第四に、本書はハンガリーを中心的に扱っているが、たえず東欧全体を念頭に置いている。それは、東欧諸国の今後の発展は、ますます東欧の規模での、国民経済を越えた地域的发展という方向をとらざるをえないという筆者の問題意識によるものである。そして本書は、いくつかの問題にかんしては、直接に東欧全体を対象を拡げている。しかし他の問題についてはそれはなされていない。そして、ハンガリーを中心に分析されたことが、他の東欧にも大なり小なり共通するということが示唆されているにすぎなくなっている。それは筆者の力量不足のためである。

さて、以上のような本書の視角のなかで、筆者がここで意味あるものとしてとりあげた東欧の経済史上の問題は、東欧における農奴解放、東欧の農業の資本主義的发展、東欧における金融資本の形成、そして東欧をめぐる外国資本の動きである。これらの問題について、ここで多少の位置づけをしておくことが必要と思われる。それは本書の構成を説明することになるとともに、東欧の経済史を研究することの意味にもつらなるのではないかと思われるからである。

まず第一部で扱われる東欧における農奴解放は、フランス革命における封建的諸関係の一掃とはあり方を異にして、プロシアの「農民解放」にはじまる「上から」の封建的諸関係の改革の系列に入る。西欧との市場関係の拡大を契機とする一八四八年革命期のハプスブルク帝国内諸領邦での農奴解放から、一八六〇年代のロシアやルーマニアでの農奴解放にいたる東・中欧の農奴解放、およびトルコ支配からの解放時に行なわれたバルカン諸国での封建制の廃止は、一方では一九世紀中頃に世界的に現われたこの種の変革の主要な一環であったと同時に、それがかかげた課題の究極的な解決はロシア革命や第二次大戦後の東欧の土地改革に委ねられるものであった。しかも、ここに始まる「上から」の解決とそれに対する革命的な解決との対決は、その後のラテンアメリカ、アジア、アフリ

カといったより後進的な地域の土地改革においても続くのである。したがって、近代以後の土地改革の歴史を全球的に把握しようとするとき、東欧の農奴解放は不可欠の問題であるといえよう。

本書第二部では、一九世紀の末から二〇世紀の初めにかけて進む東欧の農業の資本主義的發展が取扱われる。それは一般的には、東・中欧においてはいわゆる「プロシア型」の道を歩み、バルカンでは小農民的な道を歩むものであった。そこでの問題は、こうした東欧の農業の資本主義的發展が、工業的西欧との分業関係に基づいて規定されたことであり、そのかぎりでは他の地域の農業の發展に共通するということである。つまり、東欧の農業の資本主義的發展の中にみられる一定の不均等發展は、世界のより農業的な国々の發展にもみられるそれを、より早期により明白に示しているのである。東欧の場合には、農業の資本主義的發展は第二次世界大戦前夜においてもなお継続する過程であって、結局は、人民民主主義革命につながれていくのである。

右のような農業の發展を基礎にして東欧諸国における資本主義的な信用業や鉄道業や工業の發展が始まるが、その發展はまさに西欧における金融資本の形成期と時期的に一致していた。したがって、東欧ではいわば産業資本主義が確立しないうちに金融資本の形成が始まるという發展がみられた。これが本書第三部の扱う問題である。ここにおいては、東欧の發展は隣接する西欧の影響をより直接的に受けることになるのであり、さらに東欧の中にも一定の關係があり、そのために生じる發展の不均等性は著しいものがあつた。そうしたものとしては、独占の早熟の形成、地主の大きな經濟的役割、銀行業の主導的役割、早熟的な資本輸出、小工業の広汎な殘存などをさしあたりあげることができよう。だが、まさにこうした問題こそ、しだいに世界の他の地域が経験する問題なのであつた。そして、ここでも、東欧の金融資本の確立の過程は、第二次世界大戦前夜にまで継続するものと考えることができるのである。

西欧と東欧との直接的關係を最も端的に示すのが、一九世紀末から拡大する両者の資本輸出入關係であつた。そ

れはまた、東欧内部での資本の相互関係をも含んでいた。しかしさらに言えば、西欧にとつての東欧への資本輸出は全世界的規模での商品＝資本輸出入関係の中で位置づけられており、例えばアジア諸国へのそれと有機的に結びついていた。これが本書第四部の扱う問題である。こうした資本輸出入関係を支配＝従属の関係として規定することは容易であらう。だが、今日の東欧諸国の社会主義建設はこのような一つの歴史的條件なり遺産なりをいかに消化していくかという問題をたてているのである。そうした問題観は他の地域では無縁であらうか。

以上に述べたような議論は要約してしまえばつぎのようになるであらう。つまり、東欧の資本主義的経済発展はより先進的な西欧のそれに対応し規定される形で進んだが、そうした東欧の発展はそういうものとしてより後進的な諸地域の発展にも共通する諸問題を有しており、それゆえに世界的な資本主義の発展を考えるばあいに重要な中間項をなすということである。そしてその中間項がいまや人民民主主義革命をへて社会主義の道を歩みつつあるということが重要なのである。

本書のはじめにあたつて多少技術的な点について説明しておかねばならない。

まず第一に、本書はハンガリーをその主たる対象としている。これについては、第一次世界大戦前のハンガリーはオーストリア＝ハンガリー二重王国の枠内で考えるべきではないかという疑問が出しえよう。それは正当な疑問である。これに関しては、本書では二重王国という枠が持つ意味がハンガリーにとつて決定的な場合にはできるかぎりそれを指摘しておいた。しかし、これに関しては別の問題もある。つまり、この時期の東欧では今日の東欧諸国家のどれをとつてみても西欧的な国民経済というものを持っていないという点である。東欧諸国は、あるいは多民族帝国の一部であったり、あるいは分割されていたりしていた。したがつて、二重王国内のハンガリーのみをとりあげることは東欧にとっては変則的なことではないのである。

第二に、右に關係することであるが、本書で扱っているハンガリーの地理的範圍は、本書の扱う時期の枠内でも変化している。普通ハンガリーという場合、広狭両義で用いられる。狭義のそれはもちろんハンガリー人が居住する地方（およびスロヴァキア）からなる。だが、広義のハンガリーはウィーンの支配との關係で時代的に異なるのである。（一）一八世紀はじめから一八四八年までは広義のハンガリーには狭義のハンガリー以外にクロアチアが含まれられ、トランシルヴァニアは除外されていた。（二）一八四九年から一八六七七年の「アウスグライヒ」までは、広義のハンガリーは存在しなかった。狭義のハンガリーとトランシルヴァニアとクロアチアはそれぞれ別々にウィーンの支配を受けていた。（三）一八六七年以降は広義のハンガリーには狭義のハンガリーとトランシルヴァニアが含まれ、クロアチアは「ハンガリー王国」という場合にのみ含まれた。この「ハンガリー王国」がライタ川以西のオーストリアやボヘミア諸州と二重王国の關係に立ったのである。

第三に、本書では「東欧」という場合にはエルベ川とアルプス山脈以東、ウラル山脈と黒海以西のヨーロッパ部分を念頭に入れているが、その中でも、「バルカン諸国」とそれ以外の「東・中欧」とを区別して用いている。

第四に、ハンガリー人の名前の記しかたは、日本人のそれと同じく姓・名の順であるのでそれに従った。他の国の人の名前は名・姓で記してある。

第五に、度量衡については付表を参照していただきたい。

最後に、本書のある部分はすでに発表してある。第一部第一章は『土地制度史学』第七八号、同第二章は『東欧史研究』創刊号、一九七八年に掲載したものに一定の加筆をしたものである。第二部第二章は『経済研究』第二九卷第三号、一九七八年に掲載したものを一部削除したものである。第四部は『國際關係学研究』（津田塾大学）第一、二号、一九七五、一九七六年に発表したものに貿易關係を補なったものとなっている。

本書ができるまでには、実に数多くの方々のお世話になった。ここですべての方々のお名前をあげることはできないが、何人かの方々についてはとくにこの場を借りてお礼を申しあげなければならない。

まず、江口朴郎先生には学部・大学院時代から津田塾大学にまでいたる御指導のなかで、政治と経済との関係、国民経済の意義、世界史の中での東ヨーロッパの位置づけなどについてお教えをいただいた。また、百瀬宏先生には、東欧史の個々の具体的な問題を通して歴史研究の上での種々の御教示をいただいた。しかし、両先生からは、公私にわたる御指導の中で、何といっても社会科学者の生き方というものをお教えたことが重要であった。

本書の準備過程をふりかえってみると、さらに、学部・大学院時代に帝国主義論やソビエト経済史の面で御指導いただいた宇高基輔先生、学部時代から今日まで一貫して現代史の見方や方法をお教えくださっている斉藤孝先生、国際経済の面での御指導をいただいた川田侃先生と村野孝先生、イギリス帝国主義について御指導いただいた山田秀雄先生、またオーストリア帝国主義研究について御指導いただいた故熊谷一男先生その他の方々の御恩をうけていることに思いいたされる。

だが、ここにとくに記さねばならないのは、筆者の一九七二年秋から一九七四年春までのハンガリー留学中およびその後になたて、筆者のハンガリー経済史・東欧経済史研究について卒直な助言と教示を与えてくださったハンガリー国立経済大学学長ベレンド・Ｔ・イヴァーン教授、同科学アカデミー歴史学研究所所長ランキ・ジェルジュ教授、同主任研究員ニーデルハウザー・エミール教授である。ベレンド・ランキ教授の近年の著作には多少近代化論的すぎる点も感じられるが、その柔軟な考え方には大いに教えられるものがあり、本書でもそれを批判的に発展させようとした。また、ニーデルハウザー教授の東欧史研究とりわけ東欧の規模での農奴解放の研究は筆者には大いに参考となった。

本書の十年近い準備過程の大半は「東欧史研究会」の歴史と合致していた。一九七五年春に発足した同研究会で内容豊かな討論をとおして、筆者はどれだけ勉強させていただいたか知れない。津田塾大学をはじめ諸大学の大学院生を中心とする同研究会のメンバーの方々に心からお礼を申しあげたい。

資料の点では、とくに、京都大学経済学部図書室のマイヤー文庫にあるハンガリー統計などの利用のお世話をくださった同大学経済学部の大野英二先生、および同図書室資料課の皆様にお礼を申しあげなければならぬ。終りになってしまったが、本書の出版のために側面から援助したえず激励してくださった津田塾大学の馬場伸也先生と忍耐強くご援助いただいたミネルヴァ書房編集部の後藤郁夫氏に心からのお礼を申しあげておきたい。

このように多くの方々のお援助をえてできた本書が、どれだけ読者の方々の批判にたえうるか、筆者には自信はない。今後とも各方面からのお教えをいただいて、本書をよい方向に発展させていきたいと願うのみである。最後に、私事であるが、本書を父母に捧げたいと思う。

一九七九年九月二四日

南 塚 信 吾

なお筆者はこの研究の過程で一九七六年度文部省科学研究費助成金を受けている。

目次

序 文

第一部 東欧の農奴解放

序 論

第一章 農奴解放前のハンガリーの農民経営と領主経営……………二

第一節 領主制農場経営の拡大とマリア・テレジアの賦役令……………二

第二節 農民層の分解……………七

第三節 領主経営における資本家的要素の成長……………二五

第二章 東欧の農奴解放……………九

——ハンガリーを中心に——

第一節 ハプスブルク帝国における農奴解放……………五

第二節 ロシア帝国とルーマニア王国における農奴解放……………六

第三節 東・中欧諸国の農奴解放の共通点と相違点……………三

第四節 バルカンにおける農奴解放……………六

第二部 ハンガリーにおける農業の資本主義的發展

序 論

第一章 ハンガリー農業の資本主義的發展

第一節 農奴解放から「アウスグライヒ」まで

第二節 「アウスグライヒ」から「農業恐慌」まで

第三節 「農業恐慌」期

《補説》 農業生産力の發展

第二章 一九世紀末の土地所有構造

第一節 土地分配の時代的変化

第二節 土地所有者と借地人

第三節 地域別土地所有構造

第四節 東・中欧諸国の土地所有との比較

第三章 一九世紀末の農民経営と地主経営

第一節 農民経営

第二節 地主経営

第三部 ハンガリーにおける金融資本の形成

序 論	一七
-----	----

第一章 「アウスグライヒ」までのハンガリー工業	一五
-------------------------	----

第一節 鉄道建設	一五
----------	----

第二節 銀行業	一五
---------	----

第三節 工業発展の始まり	一六
--------------	----

第二章 一八七三年恐慌	一六
-------------	----

第一節 銀行ブーム	一六
-----------	----

第二節 鉄道建設ブーム	一七
-------------	----

第三節 工業設立ブーム	一八
-------------	----

第三章 第一次工業援助法と仏壠資本	二五
-------------------	----

——一八八〇年代——

第一節 銀行業の再編成	二七
-------------	----

第二節 鉄道の国有化	二〇
------------	----

第三節 工業発展と独占の登場	二三
----------------	----

第四章 ドイツ資本と工業化政策 三四

——一八九〇年代——

第一節 ドイツの銀行とハンガリーの銀行グループ 三五

第二節 地方鉄道の建設 三三

第三節 工業化政策 三六

第五章 金融資本の形成 三五

——一九〇〇〜一三年——

第一節 一九〇〇年恐慌と第四次工業援助法（一九〇七年） 三六

第二節 外国資本と大銀行 三六

第三節 外国資本と大工業企業 三六

第四節 金融資本の形成 三七

第五節 金融資本の特徴 三九

第四部 第一次世界大戦前の東欧をめぐる資本輸出入関係

第一章 予備的考察 三五

——イギリス、フランス、ドイツの資本輸出のなかでの東欧——

第一節 イギリスの資本輸出 三四

第二節	フランスの資本輸出	三六
第三節	ドイツの資本輸出	三三

第二章	東・中欧への資本輸出	三〇
-----	------------	----

第一節	オーストリア・ハンガリー	三〇
第二節	ロシア	三六

第三章	バルカンへの資本輸出	三四
-----	------------	----

第一節	バルカンの鉄道建設	三四
第二節	ルーマニア	三七
第三節	ブルガリア	三三
第四節	セルビア	三六

付 録

A	度量衡
B	統計表
C	付表(Ⅰ～Ⅶ)

索 引

第一部 東欧の農奴解放

序 論

一八世紀末の数十年以降、東欧における封建制は解体期に入り、封建制から資本制生産への移行が始まった。⁽¹⁾とくに、イギリスの産業革命とフランスの市民革命およびナポレオンの大陸体制の影響によって、東欧の国外・国内市場が拡大されて、資本主義的商品生産の芽が成長し始め、封建制の解体過程が促進された。これ以後、東欧の資本主義は、西欧で産業革命が最盛期を迎えるときにその発展の第一段階に入るのである。だが、このことは東欧の資本主義発展に一定の条件を課していた。

すなわち、東欧経済はここにはば一世紀にわたる世界分業からの孤立を脱し、再び世界経済に巻き込まれたが、しかし今度はより進んだ資本主義の支配するそれに巻き込まれたのである。一六—一八世紀の東欧の封建制の特殊な発展——東・中欧の「農場領主制」・「再版農奴制」⁽²⁾とバルカンの「トルコの封建制」⁽³⁾——が西欧の初期資本主義（商人資本）によって支配される近代的世界経済への東欧の適応の第一歩である⁽⁴⁾とすれば、東欧は一八世紀末以来、より発達した資本主義（産業資本）の支配する世界経済に適応しつつ、独自の資本主義的發展をとげねばならなかったのである。

その独自性は、さしあたり、東欧における資本の本源的蓄積のあり方、ブルジョアの変革のあり方に現われるは